

「淑の字が間違っていたわよ」と言うのと、知人は、

「あら、ご免なさい。それにしてもあなたは、こんなに難しい名前の文字を、子供のころからよく間違えずに書いてきたものね」と宣のたまわった。

ベッド生活

小野澤繁雄

このあいだ、といつても昨年のことだが、中の子がつきあっているという女性がわが家を訪ねてくれた。子といっしょにである。いろいろ手土産で気を遣わせてしまったが、こちらの緊張もある。話の中で、ベッドですかそれとも床に布団をしていますかと聞いたところ、ベッドだという。

近所に住む妹の子、姪っ子は親がベッドのところ、床にしているという。

子どもたちが小さい頃は二段ベッドで、そのあと一段ずつにして、それぞれじぶんたちの部屋に置いて使っていた期間がある。

なんでこんな話かというのと、一昨年高齢の母親が兄の家で亡くなって、使っていたベッドが余っている、使わないかと云われたことがある。向うは全員すでにベッドで、処分するしかないところ、という。

こちらは一つある畳のへやにそれもこのところ敷きっぱなしにしていたので、これは、伸びをするにもいいし、疲れるとちょっと寝そべて本を読むなどができていた。それで、いろいろ迷うことをした。

しかしながら、これからは施設に入るかもしれないし、入院だつてあるかもしれない。ベッドには慣れておかなければならない、という声もじぶんのなかに聞く。

これまで出張で、ベッドになることもあった。どの程度ベッドメイクを外して、身を入れたらいいのか、きゅうくつに休んだ記憶もある。それに枕が高く大きかった。

マットレスはすでに処分済みで、残りのいわゆる簀の子ベッドをとどけてくれた。組み立て式な

ので車に入れてきてくれたのだ。ついでに組み立ててくれた。

元々がニトリで買ったものだったので、近場のニトリで、マットレスを買った。売場の小母さんの話では、厚手のものほど女性に人気があるということだったが、固い、通気性もよいという、厚さ4・5センチの、店で二段ベッドで使われていたものにした。

へやの片づけをしてから秋口になって使い始めたが、緊張しているのか、夜中よく目が覚めてしまう。マットも簀の子も比較的しっかりしていたが、床にじかには及ばない。掛け布団も引っ張られて、重さをもってしまう。

布団も枕もだが、低反発のものとか、素材などで流行もあれば、値段もあるようだった。

幸いベッド自体そう高さがないので、寝室にしていた和室には合うようだ。天井が近いということもない。ただ、ベッドがあるといかにもへやが寝室然としてしまい、テレビも置いてあるが、足が遠のいてしまった。

一度落ちたことがあるが、それは目覚ましに手を伸ばしたときだった。

よい睡眠は、それがえられなかったときに、考えることがあるが、現役で働いていたときは、すぐにも寝入ってしまうので、考えることもなかった。毎日が日曜状態になると、考える必要がないかというところでもない。ベッドは昼寝にもいいよ、ちよつと寝るのにいいと、これは兄の話で、兄は昼寝をしているらしい。

「清紫会」だより

◆第161回 平成二十九年十一月十六日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室

〈提出作品〉小野澤繁雄・近鉄(ちかてつ)／松井淑子・名前の文字について／丸山弘子・友人の恐怖

◆第162回 十二月二十一日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室

〈提出作品〉市川茂子・朝の散歩／小野澤繁雄・ひげそり／林博子・柿生の里

◆第163回 平成三十年一月十八日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室

〈提出作品〉小野澤繁雄・ベッド生活／林博子・私の生まれた所